

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23223003	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	向社会的行動の心理・神経基盤と制度的基盤の解明	研究代表者 (所属・職) <small>(平成28年3月現在)</small>	山岸 俊男（一橋大学・大学院国際企業戦略研究科・特任教授）

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価		評価基準
○	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

向社会的行動については、心理学において既に多くの研究がなされてきたが、本研究では、心理学的実験研究に脳神経生理学的研究を統合させるという野心的な視点からの取り組みが行われている。これまでの成果として、既にいくつかの重要な知見が得られており、研究は文・理の間の新しい共同研究として極めて重要な意義を持つ新しい研究展開を行っており、期待以上の成果を上げている。

得られた知見は、2種類の非協力的行動をとるものに関する発見と罰行動についての新発見であるが、これらの発見は行動実験と脳構造分析を多数の同じ研究協力者に実施することで初めて見出された成果である。

今後の研究についても、これまでの研究成果から判断して、当初の目標以上の成果が達成できるものと判断される。

【平成28年度 検証結果】

検証結果	
A	<p>当初目標に対し、期待どおりの成果があった。</p> <p>本研究は、ヒトに特有な高度な向社会行動の生成と維持を説明する原理の解明を目指すものであり、研究代表者が提唱する社会的ニッチ構築理論に基づきつつ、向社会行動を支える心理機序を多角的な社会心理学的実験によって明らかにしようとするものである。一連の経済ゲーム実験、脳画像実験、遺伝子多型分析を通して、現代に生きる人々の文化差や向社会性の在り方の違いが社会的ニッチの違いを反映していることを示す証拠を提出しており、その成果は国際的にも高いレベルにある。</p> <p>今後の更なる知見の発表によって、研究成果の社会へのより一層の周知を期待する。</p>